

人生の透視図

人間が一回限りの人生を生きているということはどういうことなのか。逆にその人生を終えて死んでしまうということは何なのか。

果てしなき問いかけが、この小説には反響し続けている。中学時代からひそかに想(おも)いあっていた一組の高校生が、彼らの素朴で淡いことばをもって、人間の生と死の根源をさぐり出そうとしている。

時代の流れに乗って流されてゆくだけの若者とはまったく異質の〈ぼく〉と〈アキ〉は、まじめにかなたに存在する自分たちの姿を想い描こうとしている。恐る恐るキスをするその初々しさが、目下の彼らの存在証明であって、その先は頭の中で空転するだけだ。だから四六時中一緒にくっついていたい、互いを大切にしたいと思いつける。

しかし、人生には皮肉がつきまとい思いどおりにはいかない。〈アキ〉が重い白血病になり、余命いくばくもないというところに追い込まれ、〈ぼく〉は彼女にそれをさとられまいとしますます優しく煩悶(はんもん)し続ける。

「世界の中心で、愛をさけぶ」(片山恭一著)

彼女が死んでしまえば、もう彼女の感触は消えてなくなってしまう。それが死というものなのか。彼女が彼の前からいなくなったとしても、彼女の感触がずっと残り続ければ、それは彼女が彼の内に生きていることになるのではないか。〈生〉とは何か、そして〈死〉とは何か。

作者は際立って低姿勢をとりながら、若い男女に人間本来の大きな主題を語らせ、そして苦悩させてゆく。

人間の積み重ねてきた知恵や叡智(えいち)にそっぽを向いているような傾きにあるこの時代、彼と彼女の淡き恋と苦悩はまるで珠玉のように思えてくる。

〈ぼく〉の祖父は、とくに妻を失っているのだが、添うことのなかった初恋の人を想い続けて、その人の骨をひそかに携帯している。〈ぼく〉は祖父が死んだら二人の骨を散布する約束をしている。

人生の透視図、人が人を愛する究極がそこに見える。(栗坪良樹・文芸評論家)

(小学館・1400円) = 2001年5月17日⑤配信

「出逢い」の不思議考察

「出会い系」とは、パソコンや携帯電話ネット上における社交恋愛サイト(広場)のこと。このダイレクトな言い回しの流行語が、世間一般へ急速に普及しつつある。

だれかに紹介されるのでなく、「偶然」に出逢(あ)いたい! 「運命」の赤い糸で結ばれた未知のだからと、ある日突然、めぐり逢いたい! 恋愛行為以前の「出逢い」に、なぜ、そこまで恋い焦(こ)れるのか?

きわめて身近な難問に、哲学・思想の次元から、誠実に答えたのが、本書である。

筆者は、プラトン、ニーチェ、九鬼周造らを手がかりに、知的探索を開始する。元をたどれば、「偶然」という抽象概念は、現実の「出逢い」からしか定義できない。「遇(あう)」は、「偶(たまたま)」に先立つ、基本概念らしい。

では、その「偶然」を「運命の出逢い」と感じるのは、なぜ? そもそも「運命」という概念じたいに、「未来に開かれた選択のチャンス」と、「過去に定められた宿命」という、矛盾が含まれて

「偶然性と運命」(木田元著)

いる。

この矛盾こそが、私たちを魅(ひ)きつける。人間が過去・現在・未来に生きる、矛盾した「時間的存在」(ハイデガー)だからこそ、出逢いの一瞬が、「特権的瞬間」として、インパクトを生むのだ。

探索をふまえ、筆者は、ドストエフスキー「悪霊」「カラマーゾフの兄弟」から、二つの例をとりあげ、「運命的な出逢い」を展望していく。

運命の出逢いは、男女の間にだけ、起こるのではない。現象学研究の第一人者たる筆者は、社会思想史の故・生松敬三氏との名コンビで、名著を世に送り出してきた。何よりも本書には、二人の運命的な出逢いから生まれた、魂の交遊の楽しさが、調べゆたかに響いている。

今、一瞬の刹那(せつな)的な出逢いをもとめ、日々焦りまくっているアナタへ、おすすめしたい。(藤本憲一・武庫川女子大助教授)

(岩波新書・680円) = 2001年5月17日⑥配信